

“NOTO NOT ALONE”

信金中金月報掲載論文編集委員長

地主 敏樹

(関西大学 総合情報学部教授)

今年5月ようやくに能登を回る機会を得た。阪神大震災以降諸被災地を訪問して、大規模災害後の復旧・復興について検討してきたので、能登の被災地も訪問したいと願っていた。共同研究者の堀江進也教授（尾道市立大学）と同行二人。ただ、関西から能登は遠い。北陸新幹線が敦賀止まりだから、大阪から和倉温泉まで二度乗換えが必要になった。奥能登まではさらに1~2時間かかる。羽田から能登空港まで1時間で飛べる首都圏とは段違いである。

前泊して早朝に金沢をレンタカーで出発、能登町の興能信用金庫本店を目指す。信金中央金庫を通じて13時にヒアリングを依頼してあった。のと里山海道に入ると羽咋辺りまでは4車線の自動車専用道路であった。その先は、数多くのがけ崩れや隆起・陥没などに対応した修復工事、2車線になったり、片側通行になったり、ジェットコースター化したり。スローダウンはさせられたが、穴水ICまで辿り着いた。立ち寄ったスーパーには商品が豊富にある。地道もやはり傷んでいるが、能登町宇出津に到着。

午前11時前だったが本店営業部を訪れてみた。能登復興支援部の加賀裕副部長にお話を聞くことができた。元旦の発災を受けて大変だったが、4日に多くの店で営業再開して相談窓口を設置したこと。保管場所に困ったタンス預金の預け入れが多かったこと。返済繰り延べの条件変更依頼に対し電話で手続きの大部分を対応できるようにしたこと。現在も、自然災害債務整理ガイドラインや二重ローン対策の復興ファンドなどはまだ成約が少ないが、補助金の利用について顧客を支援していること。住宅再建については、若年層中心に人口減が厳しく、建設費が高騰していて坪単価200万円に達しかけていること。震災前から金沢方面に支店展開し本部機能も分けていたことがBCPに役立ったこと。鹿児島や亀有など信用金庫のネットワークによる支援で助けられていること。休眠預金利用プログラムのこと。予定の時間は瞬く間に過ぎ、後日のフォローアップをお願いして退出した。

本店脇、ほぼ満席の「風来坊」でイシリ井を堪能した後、珠洲を目指す。リポート珠洲の復興支援ガイドツアーに参加した。ランドマークの見附島を望む公園で、ガイドの宮口智美氏と会い、リポートの車で被災地を巡った。宝立町の津波被災地はほぼ更地となっており、東日本の津波被災地を想起させられる。幹線道路の橋は壊れて三分割されているが、人や自転車は通

行している。大寺の本堂と山門は座屈し、屋根銅板は盗難予防で剥がされていた。避難所となった宝立小中学校へ回り、プレハブ応急仮設住宅を見学。東日本大震災では各戸玄関に風除が後付けされたが、ここでは壁と一体化してある。持続的に利用可能な木造仮設住宅も目立つ。仮設住宅の改善は進んでいる。

キリコ倉庫被災現場を見て外浦側へ、工事だらけの国道249号線の峠越え。昨秋の豪雨災害土石流で壊滅した大谷川沿いの集落を見学。撤去を待つ住宅2階に土砂が入っている。畠の上に金属板を敷いていた仮設道を舗装化した上を通る。「潮騒レストラン」（奥能登国際芸術祭作品、坂茂氏）に到着。海底隆起で海面上に出た白い岩と、以前から出ていた黒い岩との不思議な光景を、高台から眺める。堤防外側の隆起した海岸を整地して、仮設住宅を建設している。「海よりも山が怖い」という地元の要望だという。峠道を戻って飯田港へ。賑わいの中心だったショッピングセンター（閉鎖中、取り壊し予定）をみて、近くの「さいはてのキャバレー」（奥能登国際芸術祭インフォメーション、取り壊し予定）脇に停車。周辺地盤は約1m沈下。北国新聞記者が撮影した「迫りくる3m津波」の現場である。人口が激減して高齢化が急進する中、復興まちづくりの難しさを考えさせられた。

和倉温泉宝仙閣に宿泊。美湾荘などいくつかの旅館・ホテルは営業を再開している。近くの「あうん」で、海鮮と能登風ふわふわお好み焼きの夕食。6階個室は広く、窓サッシは真新しい。修復された大浴場は懐かしい和倉の湯だった。人繰りも厳しいだろうに、朝食もきちんと提供され、復旧工事関係者は7時過ぎに出動していく。小雨の中、護岸の大規模修復工事を見学。旅館近くの地元スーパーでは能登米が5kg3千円余だった。

輪島まで1時間余、能登空港の先は迂回しつつも順調に到着。旧輪島駅跡は傷んでいたが、観光案内所の老婦人に訪問先のアドバイスを受けた。全面更地となった朝市焼け跡を見て、輪島塗会館へ。輪島漆器商工業協同組合事務局の松本石根氏に業界の現状を聞く。多くの組合員が被災したが、現在は応援需要が強く、職人さんたちも頑張っているとのこと。組合が復旧アンケートを回収したところで、集計結果に基づいて話をいただいた。ファイナンス面では、失われた原材料購入に向けた伝統産業再生補助金が使われており、なりわい再生補助金の利用は未だ少ないとのこと。会館駐車場は地面が隆起し豪雨災害では床上浸水したが、現在は数百の輪島塗作品が展示販売され、隣地では仮設工房が稼働していた。地元スーパー内の朝市出張屋台も応援需要で賑わっていた。修復成った白米千枚田を訪問して今回の調査を終えた。

大規模災害後の復旧・復興過程は、どこも悩ましく、時間もかかってしまいがちなものである。しかし、能登の被害状況は多くの人の推測を超えているのではないだろうか。最後に、我々の勝手な要望に応じて貴重な時間を割いて頂いた方々に感謝申し上げたい。